

昭和13年3月1日（火）

快晴、敷き布団乾かす。久子と余、居残り、澄道、反物を買に行き、二時を過ぎるも販らず。四時間以上を費やす。余、久子連れ、道子等を俟たず出発。松屋、利益配当大売り出しに相当。ビスケ二斤25、中津和博毛ズボン80土産に求め、上田谷地に御召し3, 50、久子に洋傘2, 50、内一円余補給。菓子1, 50二ヶ、1, 30一ヶ明日届けさす。最後長崎カステラ2, 00二本、道子に持参さしむることを約して、一先ず中津に行き、中津より出発のことに打合わせを了す。

昭和13年3月2日（水）

此の朝中津行。道子の着物を縫うて貰ふこととなり、反物を持参。恰度、離れ座敷に子供と遊び居たる愛子に反物を差出して、四日東京に携行、其れ迄に縫上げ方依頼したるに、余裕のないのを理由に断りたるが、他に依頼の心当たりあるらしく承諾し呉る。朝吹氏妻君に頼むらし。一旦局に鞆を托して出掛けたるも、急ぎたるため発汗を催す。局の仕事をして五時帰宅。巖魚釣りに行く。入浴。

昭和13年3月3日（木）

悦子を世話する、例の如し。朝吹氏臨局。着物何時まで出来ればよきや等に付き、尋ねらる。余の出発の間に合ひなば可なる旨、答ふ。五時帰り、所得税の申告に付き巖と打合わす。巖四十円銭別す。雨天。

昭和13年3月4日（金）

道子は午後六時三十八分発、余は午後七時六分発にて門司に午後八時三十五分、道子は八時四十分着の順序

とす。余の汽車賃は中津塩川間11, 97、而して特急料金2, 50銭は此の朝求め得、第四室と決定す。下関発桜発時刻は午後十時。一先ず下関駅に約三十分待合わす。此の間に道子と会う積もり。夕食は五時済まし、六時半出発。挙家、余を送り、停車場に発車を見送り呉る。朝吹氏も来らる。斯くて門司にても連絡船内にも居らず、下関駅に於いても見当たらず、九時三十分列車に乗り込む。猶見えず。暫くして荷物を捜す気配の者が夫れらしと注意するに、果たして道子なり。門司にて赤帽に依頼せず、重荷を抱き途方に暮れ連絡船に遅れ、次の急行の間に合い下関にて赤帽に依頼したるも、其の荷物が見当たらずぬ為、赤帽を探し居たるものなり。恰度荷物があり、列車の部屋も同一なるより安堵して余の傍らに来たりたるも、涙を流して居れり。道子は其の儘寝台に行き、余は其の位置に寝る。長靴を穿きたるをスリッパに改め、空気枕を出し準備す。荷物は赤吊りトランクー、土産物入れ、風呂敷包み一、小型トランクー。手に余りしは其の処なり、赤帽に頼む方法を知らざりしものの如し。朝吹氏、着物朝届けらる。

昭和13年3月5日（土）

車中煮卵（50銭拾三ヶ）食しつ、朝昼食を済ます。道子食堂に朝行く。サンドウィッチ及び牛乳を、余の為求め来る。秀夫より二円七回忌供養、外三円三谷へ届け方、道子より申出あり。晴天、次第に曇り。午後四時四十分東京駅着。トシコさんとみわ氏と各一方の出口に待たる。みわ氏の囀（おとり）に引罹かる。新宿まで電車。敏子さんと別れ、みわ氏の案内にて駅前よりバスにて本町通り三丁目下車。十六番地の神社前同氏邸に入る。夜東京

市地図を求めに外出。みわ氏案内に跟着て来らる、40
銭。貢氏とも色々話す。十一時寢床。三疊に道子みわ氏
休む。

昭和13年3月6日（日）

快晴、暖気初夏の如し。和服に改め高橋様を訪ね、平
塚様を訪ねんと欲す。曩（さき）に平塚様を訪ねたるに、
渋谷よりバスにしたるが松蔭神社前にて下車すべきを、
其の手前にて下車したる為、徒歩五六分間。然るに生憎
不在。女中さんに面会、土産物を差措き帰り、午後より
高橋様を渋谷下渋谷に訪ふ。奥さん居らる。信子さんにも
面会、高橋様出張不在。半時間話し帰る。バス青二十
二区分一綴88銭にて求む。流汗淋漓たり。

昭和13年3月7日（月）

雨、貢氏よりトンビ借用。昨に引換え甚だ寒し。貢氏休
み、四人して外出。バス18区残りあり、銀座まで青バス
3区四人分。12区銀座より地下鉄三越へ、次いで高島屋
に。後者は新しき建築だけに通風換気共上乘。両方より
道子反物を求む。十七円余、余支出させらる。バスにて
新宿に、更に電車にて峯氏を六時訪ふ。貢氏最初より峯
氏への土産物かかえ、我等に案内さる。峯氏宅にて夕飯
の馳走を受け、活動写真の話など貢氏との間に交わさる。
九時辞去。

昭和13年3月8日（火）

此日は滞在、葉書を巖に出す。野見山氏にも。

昭和13年3月9日（水）

朝小雪、寒気強し。毎朝五時外出、市内を一巡して七時半頃帰宅するを常とす。此の日は貢氏に挨拶して出立せんとす。午前十時上野発急行、十時三十分東京発急行とて、九時みわ氏と出発。余神田より乗換え、みわ氏及び道子は東京駅、余は上野駅に。斯くて午後二時二十分、郡山着。待合う間、到着時刻を三谷に知らず。午後四時若松着、久雄迎えに来る。雪四五寸ふるも構内及び市内は排雪工事進捗、大部分バス通行し得る状態なり。久雄と一緒にトランクは一時預かりとす。義夫も在宅。病氣恢復せしも猶、元の體にならず。目下日勤中。夕食後炬燵に入り九時前寢床。此の朝、二郎夫妻女中連れにて若松駅に来たり。電報で知りたる義夫は之を迎えたるに、上四谷地に其の儘、赴きたる由。九日供養と知り、余に会われる積もりらしかりし。

昭和13年3月10日（木）

曇り、雪少し降る。九時に一分前、七日町停留所発に乗るを便とすと、義夫氏の注意に八時半発。途中えき氏の依頼に、素麺五把40銭求め、発車間近に駆け付く。若松駅にて一時頃20銭出して受取り、松川下車。此朝便所にて出血す。上田谷地に行けば、二郎昨日朝来たり女中を大津屋に待たせ、三時間計り話して帰途若松にて墓地を詣で、夜行上野に行く由。七日町松川間16銭なるを、七日町若松間は5銭、若松松川間15銭とらる。持参の位牌を樹て、両側に造花を配し具合よし。余は心経、其の他読経。五人の念仏、爺さんの念仏あり。正午頃より会飲赤飯あり。早く風呂に入り十時寢床。炬燵に入る。手塚様方二郎として電報、信に托す。50銭やる、10銭余り

し筈。

招待せし人名。

大塚七太郎、同久三郎、高倉孫太郎、同好三、以上念仏。仙波りさ、遠藤貢、鈴木孫市、東条政吉、以上知己。武藤義夫、大竹こま、鈴木清信、高羽次郎、同富次、同喜八、同駒次、以上親戚。高羽わくり。死亡、大塚重三、東条岩吉。転住、荒川忠治（福島）、安部すい（東京）。

猶最初、余は招待者よりは一文の心付けも受取らぬ主義にて、曩に参拾円振替にて送付置きたるが、駒次は独断にて引出物を多分にし、心付けは之を受領することに方針を改めたる由にて、引物は一円余の椀（わん）十人分一組なりし振舞い。入費31,380、心付けとして受領額12,500、残り11,120。残額は、今回三女孝子の朝鮮に養女入りの引出物として寄贈せり。同女は十三日自宅出発。一旦町北新田の養家先に落ち付き、十五日出向の由。新田迄は駒次附随せるやに聞く。「此夜オトジより金問題に付き、駒次の態度を話しありて、真相を余に質す。余より詳細通告す」（此項相違取消す）。

昭和13年3月11日（金）

晴れ。十時の松川発にておとじ、已乃り三谷伯母と一緒に出発。余は小谷温泉に行くこととなる、其の前、塩川野辺氏を訪ねる要あり。一時間早めに出発、塩川に向かう。此日沿道排雪作業。一戸一人出役、老若男女分担排雪に努めつつあり。雪多き所、尺余。塩川市内は中央に堆積したる外、両側には雪を見ず。県道筋は監区の費用にて、一兩日前排雪。若松喜多方間はバスの運行を見るに至る。然れども市内呑戸への勝手口通路は、猶、

数尺の高さに積上げあり。野辺氏に至れば、唾者は居るも誰も居らず。数回音なふて裏に声あり。少時して四郎氏の姿見え大分銷衰、歩行も困難なる如し。軽き中風ありと謂ふ。氏、用便中を呼び出したる如し。恐縮せり。土産物を出して老人を咆はり、寒冷戸外こそ暖かなるも、家の中は周囲の雪に影響して炬燵柱を放せずに火のなき処に端座して、夫れでも種々取持の出来ぬことを遺憾として陳謝さるる心持ちに同情し、永く座らして病を悪くするを懸念、匆々引上げたが、歸りに立寄るよう呉々も申出らる。駅に駆付け十時の列車に投乗し、上三寄まで39銭。列車はガソリンを経済に石炭を焚き、普通の車を使用しあり。松川にて一行と合し若松下車、徒歩にて南町に向かう。えき氏は駅前にて独り帰宅さる。余は成るべく荷物を持たぬ積もりにて、二三のラジオ講演集と齒磨き楊子類を携行せしに過ぎざりしも、オトジ氏の注意もあり、新しき寝巻、西の家より卵10、大竹駒子より九重一箱1,00を持参す。墓には猶、雪尺余あり。途中にも排雪出来て居らぬ場所一丁近くあり。墓地の台石の雪を排し、焼香し菓子果物を供え礼拝したり。前日二郎が来たりたる由なるも、線香の痕跡すら認め得ざりき。斯くて正午飯途に就き、余は栄町西分より直に西若松駅に至る。快晴、構内待合室に居るより戸外の方暖かし。上三寄方面より通学の中学生あり。汽車は午前十時五十分頃より二時半近くまで発車なし。退屈さに中学生を捉えて色々質す。小谷は水出て湯槽を浸し、内湯は揚水機損傷し入浴出来ぬと云ふ。当惑したるも其の時には其の時として対応の手段ありと、定刻を俟ち車中の人となる。二時五十分頃、上三寄着。汽車は旧式にて中央にストーブを炊

く。暖かき為め誰も其の近所に居らず。三寄より徒歩、吊り橋より24丁余にて一里余りと称す。女学生と一緒に吊り橋の上の村まで案内さる。四時近く達す。途中雪融け、時々足を踏み外し五六寸埋没することあり。長靴の重宝さを此時感ず。余の部屋は新五番、南面して陽当たりよく採光申分なし。但し入り込みにて夫婦者一組と。是は永井野の農夫と、西本の山奥の炭焼業を営む四十計りの人物なり。六畳の部屋の中央に炬燵あり。入口より左一間半の上部に、汽車の網棚式に荷物置場あり。反対側は炊事道具を置く為、三四寸高さの台を据ゆ。位置定まりて三回程入浴せり。浴槽は河に近接して深く、砂を掘り乳に達する深さあり。周囲はコンクリートにて其の洗場も其れ式にて、トタン屋根の移動式衣装入れも、八人分一個にて二個配置あり。上流に面し巨石を駢（なら）べ、出水に際し或程度防止し得る如くす。入浴客百三四十名と称せらる。聞く処に依れば木賃にて一日四拾銭。薪は自由に使用され炊事道具は貸与、布団類は同断、上敷きは其の都度交付を受く。但し洗濯したるものを交付せるかは疑問故、これ丈けは各自携帯を安全とすべし。此の外に木炭一箱20銭、これは三日を持耐ゆ。炬燵及び火鉢に使用す。向かい側の芦の牧及び新湯共、木炭は湯主持ちなりと。余の如き炊事の出来ぬ者には女中が炊きて呉れ、或いは米を遣りてもよし。米を遣らぬ場合は一食拾銭、汁は五銭とす。夫れにしても自分が炊く方合理的なり。浴槽は男女混淆、何時行くも雑踏し居れり。只飯時は幾分閑散なるのみ。出水の為、入浴不可能の場合、二三日前降雨の際半日ありたるも、内湯も臙（やが）てポンプが完全に機能を發揮するに至り、水も減退

せりと云ふ。草履竹の皮一足九銭、家の内と下の湯との間に各一足を要す。尾の本の炭焼子も飯を炊きて貰ふ。一人前二椀に過ぎず。炭焼子二椀にては生命を維持し難しと云ふ。余の分と区別し半人分位増加するに至るもオカシ。浴槽に芸人多く四十女の小原節玄女節頗る賑わう。

昭和13年3月12日（土）

朝四時前より入浴する者多し。炭焼氏より万年筆を借り、宿より求めし絵葉書六枚10銭。葉書五枚に駒次、巖、古川清一、駅前局、道子、秀夫、中尾、手塚諸子に書く。上三寄局集配は正午頃来たり。一回地故、午後二時頃より販途に就く。部屋の客人に委嘱し、若松市内のポストに投函を頼む。駒次に万年筆を送り越す様、依頼す。副食物に鮭を、昨夜と今朝と注文す。入浴七回位。此朝寒し。痔多少出血の模様あり。

昭和13年3月13日（日）

昨と今日と、朝飯と午飯と二度分を、櫃に入れ持参す。昼餐時は炊かぬ主義と見ゆ。一般の客も午餐時、炊く者稀なり。余は午餐を食わぬことを知りたる女中は、明日より昼飯分入れぬことを告ぐ。余之を諒とす。此朝炭焼き氏販る。余より一日前に来たりし由なり。午後より永井野夫妻氏販る。八日間居りし由。爰（ここ）に於いて余独り残る。淋しき思いせるも、束の間行違えに荒井村蟹川の人、63男、次いで堂島村の人、50男の二人来たり。再び賑やかさを取戻す。蟹川氏は毎年此の湯に来たり、42歳より得意先なりと自称せり。同氏の言に此の湯は痔、切り傷、淋、梅等に特効ありと。沼尻、中の沢等の温泉は胃腸に、松沢は払湯ながらレーマチスに、五色温泉は

婦人病にと各効験を説きて頗る詳し。十二日以降曇天。陽の射すこと少なし。新湯に渡舟利く、芦の牧へは数日前より渡津の便あり。料金五銭と云ふ。川端の浴槽の外廓を堀り旧浴槽を発見。爰に入浴する者もあり、余は之を利用す。露天なるも直接底より沸き出で気持よし。浅き為、寝ながら永く入浴し得る便あり。然して三四名を限度の小浴槽とて、煩わしからぬ利もあり。

昭和13年3月14日（月）

蟹川氏は橋本彦次郎と称し63、耶麻堂島氏は飯塚某と云ふ。朝寒、曇り。炬燵を囲み色々と身上話を聞く。橋本氏は石垣積みを本職とし、生花、謡曲、庭師、井戸掘り、義太夫、茶の湯をも嗜む。而して生花、謡曲等は弟子を採りて教授す。羽織を着て端座する様、俗脱の趣あり。氏の話、頗る面白し。而して悠々自適の境遇を自らも誇り、他人の羨望を蒐めつつあるを得意とし居る風あり。飯塚氏は話に合槌を打つも中途に眠る。氏には斯かる話に興味を唆らざる感あり。

昭和13年3月15日（火）

朝、寒気凛烈。日中快晴、次第に暖かとなる。正午頃、入浴。飯れば駒次より葉書及び小包あり。万年筆を送り越す。インキ注入方を知らず、ペン先を抜き注入したる疑いあり。インキ漏れの兆しを認むるに至る。此の朝、一人の女中宿下りす。橋本氏米を遣り此女中に炊かす。乃ち餞別に日本手拭い一筋を与ふ。同氏より瓜の漬物を貰ふ。筋子一度注文せし外、生卵二ヶ乃至一ヶにて間に合わす。葉書参枚道、巖、駒次に書く。彼岸近付き湯治客、漸次減退す。此夜、掘立て浴槽に胃潰瘍及び皮膚

病（梅毒三期と云ふ）の女子、其の夫らしき人物と入浴。他の浴客一様に嫌忌す。余知らずして一緒に浴す。

昭和13年3月16日（水）

朝寒気緩む、快晴。耶麻郡豊川村の人、飯塚氏を訪ね来る。氏、橋本氏の茶を無断にて入れ、之を皆に注ぎ振舞ふ。恰も我物の如し。橋本氏の態度、稍不快の兆しを見る。飯塚氏之を読み得ず。豊川氏も多年の得意客らし。今の湯寄せは、昨年二万五千元にて落札。五カ年の契約なるを以て一年五千元、一日拾五円。諸費用を差引けば、二拾円以上を得ざれば欠損を来すべし。乃ち湯治客五十名を超えるに非ざれば維持し難しと云ふ。猶、川下に発電所を起工する計画あり。其の為、水深十尺を増し、附近の温泉悉く水底に没するを以て、泉源を鉄筋コンクリートにて囲繞し、電力を以て引揚げ供給の筈なりと同氏の談。尤も是は二三年後となるらし。午後古川清一氏より来信あり。何日まで居るかと来る。葉書五枚求む。痔患、稍（やや）に軽快の兆しあり。古川清一氏に返事書く。風なく快晴。

昭和13年3月17日（木）

本朝、風強く寒し。晴天なるも、昨日に比し雲翳多し。朝食後二回入浴。便所行直後、洗面時朝食直前、此日猿又洗濯。猶十時、正午、三時、夕食前、寝前の七回乃至五回。昨書きたる古川及び中尾両氏に出す。木炭第二回求む。橋本氏曰く、目の中に物が刺さった時、メウガの根を磨って白帛（きぬ）で濾し、其の汁を附ける。切り傷の妙薬、石綿（玉石を割れば出る）を患部に附ける。

飯塚喜一郎、耶麻郡堂島四奈川字能力。ハブ草の種子を貰ふ約あり。

ハブ草のさや幹は風呂に入れると温まること妙。トマトの葉は蚤（のみ）除に妙。

狐の火箸＝虫予防便所。

オケラ＝蚊取り。

昭和13年3月18日（金）

去る十一日以来、満七日間。病患は猶全癒するに至らざるも、前回の経験に徴するも、寧（むし）ろ販宅後に於いて効果の認むべきものあり。且つ局の方も心配に付き、割愛して引揚ぐることとせり。午後二時四十分発列車に間に合う様に、午後一時半出発のことにし計算を済ます。内容左の如し。

2, 800七宿。2, 300飯汁。1, 100焼肴二、木炭二、煮魚一、筋子、草履。計6, 110。

右に対し、別に女中三名に合計60銭を与ふ。主人より絵葉書一組貰ふ。斯くて午後一時、最後の入浴を済まし部屋に至るに橋本氏不在。飯塚氏に挨拶して出発。栗村帛八（とらはち）氏へ葉書投函の為、持参。係員に上三寄にて渡す。若松駅に至れば、下り発車まで三十分余を剩す。此の間、逢々延びたる髯剃り二十五銭払ふ。塩川下車。此日快晴。七日見ざる間に、市内の雪概ね消えたり。四時五十分頃、上田谷地に到着。駒次役場行不在、トジ子女中のみ居る。トジ氏より、余よりの借金に付いて相談あり。郵便物は総て役場に配達を受け、其の為、昨秋柿を送る際、叔父の住所を西の家に尋ね、序でに記載して貰ひたる始末にて、従来手紙は状差しに入れ置く習慣を、其の関係の分は一切持来たらず。而して独り自ら苦

しみ居りたる如し。自分等家屋を任せらるる際も、借金を引継がせられ、爾来其の借金は嵩む計り。外見は頗る富裕の如く見えるも、内情は詢（まこと）に惨憺たるものありと口説く。夜に至り駒次販り、一時過ぎまで話す。

昭和13年3月19日（土）

午前一時半寢床。駒次余の枕許に来たり、初めて実情を明かす。貧乏する時の心理状態を述べ哀情を訴ふ。余も同情、善処を約し二時過ぎ漸く眠る。此日餅を搗くから泊まれとのことなるも、十時出発。塩川まで女中に荷物を負わせて先発。余は西の家に挨拶して後を追ふ。奈良屋にて九重大袋65銭三個を求め、駅にて女中に五拾銭を与えて厚く犒（ねぎら）ふ。博多までの切符12円07銭を求め若松下車。一時預かりとし三谷に向かう。義夫、同僚の戦傷者を見舞う為、東京に行きたる由にて不在。曩に三人の子供等に各五十銭を与え、今亦一円を与ふ。夕食を頂き仏前に供養して九時出発。十時、上野行き終列車に乗る。三谷より納豆二束。是は三谷で作りしものにあらざるも、糠の中に入れると失敗なしと謂わる。

昭和13年3月20日（日）

朝五時、上野着。七時半近く中尾氏方に至る。貢氏驚き起床。此日休暇の由、朝食後外出さる。余手塚様を訪ふ。此日は松蔭神社まで電車にて行く。門閉鎖されあり、ベルのあることに心附かず。思索し居りし時、通行の老女の注意によりベルを押す。果たして女中子来たり明けて呉れる。今日も不在。女中子より色々聞き、辞して停留所に至る。女中子追い来たり、何時出発かを尋ぬ。余之を断る。其の儘、帰宿。みわ氏と共に新宿を経、東京駅

へバス四区（バス券88銭）。郵便局にて大竹を尋ね、判明せず。京橋並木製作所に至りたるに休業、門扉を鎖されあり。一人の従業員が横の一角より二階に上がらんとする気配に、之を捕らえ駒次が尖端を引抜きたるパイロットを提出、修理を托す。樓上に案内呉れ、其の受領証を余に渡し、完全修理の上送付すべしと申出らる。乃ち東京駅より新宿まで電車。伊勢丹百貨店にて中津への土産品として、和博へ三輪車6, 30、外に運賃75、計7, 05を求め、途中道草せず販宿。

昭和13年3月21日（月）

昨日買漏らしあり、本朝新宿に至り三越を一巡。特急午後一時、一時半及び三時を求めんとしたるも、何れも売切れ。不得止、午後九時普通急行に改めたり。時間に余裕あり、みわ氏と明治神宮に行く。原宿迄、電車五銭。参拝して代々木より再び乗車。夕食を鰻蒲焼き1, 10づつ計2, 20。外1, 00分土産に持行き、秀夫に弍円心付けを貰ひしに對し、1, 80にて反物を求め歸る。伊勢丹は此日休業。夜の新宿は頗る賑やかなり。夜の市場にてアルバム1, 40銭を1, 20銭にて求めたり。此の夜七時三十分、暇乞いして出発。貢氏帰宅遅るるを知り、今朝出勤前挨拶せり。八時半東京駅着。所定ホームに列車着と前後し、反対ホームにも下関行き急行来着あり。一方は定時午後九時発、反対ホームの分は午後八時五十五分。不定期臨時と知られ、乃ち早き方に乗車せり。余の向かい側に某私大学生来たり。発車後何れかに行き二時間前後、酒気を帯びて来たり。前後不覚に眠り、さては余の膝に首垂れ込む。醜態、隣席の客を輦蹙せしむ。臨時列車には寝台車なし。ありとするも売切れしは明白

なり。相当混雑し、余の座席は自然独占を許さずなりぬ。
此日曇り、夜半より降雨。

昭和13年3月22日（火）

夜明け天気麗らかなりしも、汽車の進行に伴い、時に曇り時に晴れる。朝便所行き。余程時刻を注意、混雑を避けるの挙に出でたる積もりなりしも、数回ノックされ気を揉まざる。八時頃顔を洗い、食堂にて朝食を済ます。四十銭。昼食は摂らず蜜柑を求む、10。午後五時四十六分頃、下関着。門司に渡りて漸く暗し。時刻表になきも、熊本行き準急六時三十五分発にて接続せり。此の日より二十六日までの間に三日間、防空演習あり。此日燈火管制、市内も列車内も暗し。時刻表を取出したるも見ること能わず。八時半博多着、闇（くら）さはくらし。電車券を求めんにも戸を締められあり。不得止、現金にて支払う。南新町より重き荷物を両手に提げ、第六感にて驀進（ばくしん）。九時少し前着。澄子留守、他は風呂に入るべく行き不在。夕食を喫し十一時近く寢床。

昭和13年3月23日（水）

晴るるに至らず、細雨。午後市場に至り、鶴の子菓子七つ拾銭、六十銭にて求め、二個の内一ヶを山崎氏に土産に提出す。他の一個は朝吹氏に持参のこととせり。此日葉書にて安着通知を発送す。二郎は二十二日朝、後藤寺に出発せる由。夫妻一泊、生憎二十一日は雨天にて、外出の静江氏は着物を濡らしたりと。

昭和13年3月24日（木）

曇り、中津行き。団子を食べて出発。昨久子に回数券21,

80銭は不合理と認め、時間に余裕あり、駅窓口にて注意したるに20銭返戻し越せり。券面も訂正せり。中津に至れば永江氏切手請求不在。二時に至るも不来。窓口
に売捌所より請求の者を待たせて気の毒なり。即ち、余自ら本局に赴き受取来たり交付す。巖も数回余の不在中局に行きも、一度も局に居らずと。曠怠（こうたい）の嫌いあり。五時過ぎ飯れば、夕餉を済ましたる計り。女中も居りて賑やか。愛子の腹著しく膨張し居る。二郎、二十日夫妻来たり一泊すと。

昭和13年3月25日（金）

晴れ。三輪車発送案内来たりし由。猶悦子の洋服五円余にて道子に求めさせたるは、昨日交付、局員三名にも各九重一袋ずつ送付せり。昨納税1, 50、振替払込年金三円受取らず。昨燈火管制、本日午前十時演習終了。帰れば巖釣り魚、朝吹氏も共行。三輪車到着し、座敷中を挽廻し硝子一枚を損傷せり。巖間もなく帰り、三輪車を見て驚く。地方には見られぬ逸物なり。入浴。

昭和13年3月26日（土）

朝寒し、晴れ。十時より郵便講習、是永氏を遣わす。女子四名鶴居の事務員と一緒に出席。余は切手請求後、正午まで聴講。午後より電報頼信紙、貯金払戻請求書等を貰ふて飯局。午後一時二十分出発、帰途に就く。午後五時着。手塚伊都子氏より葉書あり。午後の汽車に見送りに女中と出られたとあり。夜、先日の団子の残りを頂く。此日給料及び家賃を支払ふ。

昭和13年3月27日（日）

曇り。伊田の料理屋の娘にて、久子の学校同輩と云ふが、一昨日来居り。此日も久子と朝、デパート廻り。夕食前飯伊。夜秀夫来たり、郷里の話をして聞かす。十一時半寢床。雨、時に降る。

昭和13年3月28日（月）

曇り、次第に霽れる。薄寒し。午後より次第に晴れ。ウドン蕎麦にて夕餉を済ます。風呂に行き髯剃り。澄子に理髪を頼む。明朝中津行きを皆に話す。十時寢床。

昭和13年3月29日（火）

晴れ。かなり冷ゆ。朝麵包食にて七時三十分出発。徒歩、駅に至る。此日乗客頗る多く、次の吉塚駅まで立つ。篠栗遍路者多数下車、漸く場所を占拠し得たり。小倉にて乗換の際も頗る混雑、立ち往生の客多し。午後0時20分、売捌所より印紙八百円請求。生憎永江氏不在、保険の募集と認む。余乃ち本局に行きたるに、正午の喫飯時、食堂容易に解散せず、一時まで俟たさる。此の間、庶務の人々と話す。何分高額印紙故、局長保管とて、庶務主事木下君を俟たざれば手の下しようなし。斯くて一時二十分百円七枚、拾円拾枚を収受して、市役所前の売捌所に至り之を交付し、本通りを経て飯局。午後五時飯宅。間もなく夕食、十時寢床。当地は日曜日朝より終日降雨。巖朝吹氏と釣魚。濡れ鼠にて飯り、それも夕闇迫る頃、獲物持たずと。朝吹氏に全部を与ひし由。朝吹氏八尾、巖四十余と云ふ。此日当地快晴。朝警察より巡查来る。

昭和13年3月30日（水）

朝の間晴れ、次第に曇り。一時間悦子を負うて外出。九時二十分出発。山口書記臨局。局員中書留より為替を抜き取りし者あり、当局にても払渡しを受けたる旨自白せりとて、払渡し簿を閲覧方申出らる。該当のものを発見し得たりと云ふ。猶昨警官の臨局は、朝鮮人の通帳を十七才位の鮮人小僧が窃取、当局にて搾取未遂に終わりし当時、改印届け書の取寄せを申出られたるもの。巖来たり葉書一方持来たり、ラジオ修理に持行く。女中分保険に加入者せしむ。50銭、20年養。冷氣強し、火鉢に火を入れて貰ふ。

昭和13年3月31日（木）

晴れたり曇ったり。朝悦子を負うて四十分間計り外出。貝の調製方を見る。消耗品を現物に就いて調査す。代引き期間内還付のものあり。受取人より交付方申出に対し、差出人に再送方書面出す。去る二十四日還付のものにて、配達済み明瞭と認めし為なり。巖来たり中村局長唐津に転任、後任局長来著の旨話す。午後より快晴、聊か寒し。為替二十円剩ると云ふ。余は深く詮索せず帰る。後より聞く処に依れば、五拾銭銀貨一連と思ひて支払いしも、五円は拾銭一連五円に過ぎざりしこと判明。六時頃慌てて局に来たり、交換せりと謂ふ。